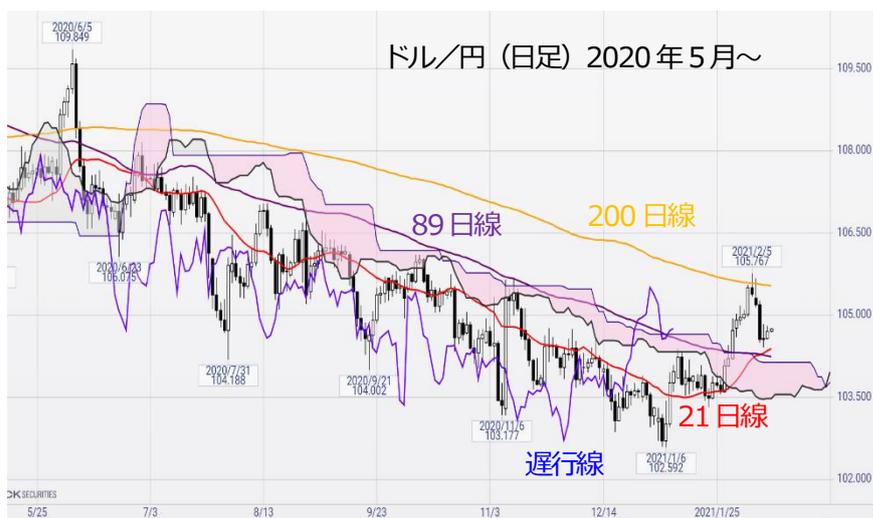


■ ドル強気の流れを取り巻く状況自体に変化はない

先週4日、ドル/円は以前から想定していた通り200日移動平均線（200日線）を試す動きとなり、翌5日には一時的にも同線を上抜ける場面が見られた。

ただ、以降は200日線にまともに跳ね返される格好となり、今週10日には一時21日移動平均線（21日線）を再び試す格好となった（下図参照）。

同日、21日線が久方ぶりに89日移動平均線（89日線）を上抜けたこともあり、基本的に



底堅い印象であることに変わりはない。また、一目均衡表（日足）の運行線が日足「雲」上限にサポートされる格好となっている点も注目されるところと言える。

先週末まで顕著に見られていたドル買い戻しの動きについては、例の「レディット騒動」で深手を負った海外ヘッジファ

ンドがドル資金確保を急いだことが一因との声も聞かれ、ドル高の持続性に懐疑的な見方もあると聞く。とはいえ、本質的には米債利回りや期待インフレ率の上昇、さらには2-10年債の利回り格差拡大（スティーブ化）などが、ドル高の大きな要因であったと考えていだろう。

その点、今週9日以降はそうした動きが少々落ち着いており、そのぶんドル買い戻しの動きが弱まった。実のところ、その背景には8日に米30年債利回りが一時2%台に乗せたことで、目先のにも一種の達成感が強まったということがある。つまり、米債利回りはあくまでテクニカルに一旦弱含みになっただけであり、取り巻く状況自体に何ら変化はない。

前回更新分の本欄でも述べた通り、今は何よりワクチン拡大のスピードがモノを言う。その意味で、ワクチンの拡大スピードが加速している米国（1日あたり130~150万回のペースで接種が進んでいるとされる）の現状から、景気回復期待の高まりを背景としたドル買いの流れが一気に逆転する可能性は低いと見ていいものと思われる。

実際、昨日（11日）は米10年債利回りが再び1.17%に迫り、2-10年債の利回り格差は再びスティーブ化していた。結果、10日に一時104.50円割れの水準まで下押ししたドル/円も足下では104.80円処まで値を戻してきている。

現在、200日線は105.54円処まで水準が低下してきており、あらためて同線を試す動きとなる可能性は高いと見る。仮に同線を上抜ける動きとなれば、次に昨年3月のコロナショック後の高値から直近安値までの下げに対する38.2%戻し=106.07円を試すとの見方に変わりはない。

一方、ユーロ/ドルは先週4日、5日に一時的にも日足「雲」下限を試す動きとなったが、そこから切り返して今週9日には再び21日線を上抜ける強含みの動きに転じた。

とはいえ、当面の上値余地は自ずと限られよう。昨日、欧州委員会は2021年のユーロ圏成長率予想を従来の4.2%から3.8%に下方修正した。その理由は、やはりワクチン拡大のスピードに対する懸念にあるとされている。

当面、1.2150ドル処は一つの節目として意識されやすく、同水準をクリアに上抜けることができないようであれば、再び日足「雲」下限水準を試すことになると見る。個人的には戻り売りのスタンスで臨みたいと考える。

（02月12日 10:15）